

都道府県番 号27	学校名 大阪府立岬高等学校	課程 全日制	学科 普通科	指定期間 26～28
--------------	------------------	-----------	-----------	---------------

平成27年度 個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

平成26年度の実践に基づき、大阪府の「高校生活支援カード」活用をベースに障がい特性の把握の手法と、自立活動の領域において障がいによる困難を改善・克服する研究を行う。また、社会によりよく適応していくためのソーシャルスキルを伸ばす指導を重視して、効果的な通級による指導法を開発する。

2 研究の概要

「高校生活支援カード」による生徒の実態把握をもとに、「個別の教育支援計画」を作成し、個々の能力・才能を伸ばすための自立活動を継続する。また、生徒の状況把握のためのアセスメント（TTAP）を活用した個別の移行支援計画の作成につなげる。

障がいのある生徒が、卒業後の自立や社会参加に必要なソーシャルスキルを習得し、個々の能力・才能を更に伸ばす「サポート岬」の開発を継続する。また、視覚化や構造化を行うとともに、拡大教材や配色に配慮した教材の開発、個別指導の試行を行い評価方法の開発を行う。さらに、学習用ロボット教材を活用したユニバーサル教材と指導方法の開発を新たに行う。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究開始時の状況と研究の目的

視覚障がいのある生徒は網膜色素変性症による視力低下、視野狭窄、色覚、暗順応、明順応などの障がいがあり、板書や日常生活動作に困難がある。また、場の空気や機微を読んで発言・行動することが苦手である。

ICT機器の活用に強い興味・関心があったので、学習用ロボット教材を活用したプログラミングの習得をとおして、情報端末のアクセシビリティの設定を学習し、情報機器を日常的に扱えるようにする。プログラミングを構築する過程で試行錯誤を繰り返し、自分なりの答えを導き出すことで自己肯定感を高めるとともに、自ら構築したプログラムを他者にプレゼンテーションし、プログラムを更に改善していくという過程で、コミュニケーション力に課題のある対象生徒に対して、ソーシャルスキルトレーニングを行い、他者とのかかわりや状況に応じたコミュニケーションが取れるようにする。

また、視覚補助具や、視覚障がいのある人でも使い易く工夫された、ユニバーサルデザインの使用することで、消極的であった日常生活動作にも積極的に取り組ませる。

（2）研究仮説

自立活動「サポート岬2」において、平成27年度から本格的に導入する学習用ロボット

教材やパソコン等を活用した学習により、コミュニケーション手段の選択と活用に課題のある生徒が、他者とのかかわりの基礎や場の雰囲気等を読み、状況に応じたコミュニケーションを行えるようになる。視覚補助具や、視覚障がいのある人でも使い易く工夫されたユニバーサルデザインの道具を使うことにより、不安や苦手意識を払拭し、興味関心を持って日常生活動作を積極的に行うようになる。これらのことを通して種々の障がいのある生徒へのより効果的な教育活動を展開し、従来以上の成果をあげることができる。

また、作業療法士等にも通級指導についての指導・助言を仰ぐことで、手指の巧緻性の向上をはかるとともに、作業速度の重要性にも気づかせることができる。TTAP 検査の結果を対象生徒および保護者等に示すことで、自らの障がいの特性を理解し、社会によりよく適応するために必要な力を身につけることができる。

(3) 教育課程の特例

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数・単位数等
<p>自立活動「サポート岬2」4単位を設定し、情報機器の活用による個々の能力・才能をさらに伸ばす指導や通級による日常生活動作の習得のための特別の指導を行う。</p>	<p>2年次「サポート岬2」では、コンピュータの基本操作を学習するとともに、手指の巧緻性の向上を目的として、モーターやセンサーを使用した組み立て式の作業車を製作し、パソコンで制御プログラムを作成する。また、作業に必要な動作と円滑な遂行のため、各種道具の使い方や保有する感覚の活用を高め、情緒の安定を図るため通級指導を行う。</p> <p>集団の中での役割分担、援助の依頼、他者とのコミュニケーション能力の育成を図る。</p> <p>通級授業において、作業の習熟度を向上させるために、外部機関の協力を得て、言語聴覚士・作業療法士・理学療法士に参加してもらい指導助言を仰ぐ。</p>	<p>年間 140 時間・4 単位</p>

(4) 個々の能力・才能を伸ばす指導（現行指導要領における一斉指導の改善工夫等）

サポート岬推進委員の各学年主任を中心に授業改善の研修を通じて、障がいのある生徒とない生徒がともに理解しやすい「授業づくり」を個々の教育的ニーズに応じ、継続的に実施する。

「わかる授業」への取組みとして、授業のユニバーサルデザイン化を推進することで、授業の改善・工夫を行い、それを検証する「R-PDCA サイクル」を取り入れる。

個々の能力・才能を伸ばす指導として、次の3項目を活用する。

- ① 学習内容や目標を明確にし、授業の焦点化を図る。
- ② ICT 機器を活用し、対象生徒の学びの視覚化を図る。
- ③ アクティブラーニングを取り入れ、問題解決力や思考力・表現力を高め、授業の共有化を図る。

(5) 研究成果の評価方法

対象生徒及び保護者へのアンケートによる評価
 個々の能力・才能を伸ばす指導について教員にアンケートを実施
 個別の指導計画の目標に対する妥当性の検討
 運営指導委員会による指導助言

4 研究の経過等

(1) 教育課程の内容

自立活動として2年次に「サポート岬2」4単位、3年次に「サポート岬2」2単位を設ける。

(2) 全課程の修了認定の要件

提出物、作品、出席等を総合的に判定する。

(3) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	4月 対象生徒の決定 個別の教育支援計画作成、個別の教材開発、個別の教育内容実施 第1回高等学校における支援教育コーディネーター研修参加 5月 視覚支援学校見学・研修 第2回高等学校における支援教育コーディネーター研修参加 6月 第1回支援教育研修「障害のある子供の理解及び指導の実際」 巡回教育相談・視機能検査 7月 第2回支援教育研修「視覚障害のある子供の指導1」 第3回高等学校における支援教育コーディネーター研修参加 8月 主治医面談 府立高校における支援教育推進フォーラムにて発表 9月 同一事業研究校訪問・情報交換 第3回支援教育研修「視覚障害のある子供の指導2」 11月 「発達障害フォーラム2014」参加 12月 プログラミング習得のための教材活用校内講習会実施 OSAKAスマホサミット参加 支援学校見学・研修 平成26年度 運営指導委員会開催 平成26年度 第2回徳島県発達障害教育研究会参加 1月 支援学校見学・研修 講演会「自閉症スペクトラム児(者)の就労を考える」参加 特別支援教育推進校視察

	同一事業研究校訪問・情報交換 2月 第一年次の効果検証・評価
第2年次	4月 個別の指導計画作成、個別の教材開発、個別の教育内容実施 5月 第1回校内支援教育推進協議会開催 6月 第1回支援教育研修「自立活動の内容と実際」 7月 巡回教育相談・視機能検査 8月 第2回支援教育研修「安心できる集団づくりわかる授業づくり」 府立高校における支援教育推進フォーラムにて発表 同一事業研究校訪問・情報交換 10月 日本LD学会発表大会にて発表 同一事業研究校訪問・情報交換 作業療法士を招いてのケース会議（第1・2・3回） 11月 「発達障害フォーラム2014」参加 「TTAP 入門」ワークショップ参加 12月 視覚支援学校見学・研修 平成27年度 第2回徳島県発達障がい教育研究会参加 同一事業研究校訪問・情報交換 1月 同一事業研究校訪問・情報交換 第2回校内支援教育推進協議会開催 平成27年度 運営指導委員会開催 2月 同一事業研究校訪問・情報交換 平成27年度 研究協議会 3月 第3回支援教育研修 「通常の学級で無理なくできるユニバーサルデザイン」 「秩序あるくずれないクラスづくり、授業改革」 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センターより 講師を招いてのケース会議

(4) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	・対象生徒本人および保護者からのアンケートや聞き取り（平成27年1月に実施）（・TTAP 検査の試行実施）
第2年次	・対象生徒本人および保護者からのアンケートや聞き取り（平成27年7月と平成28年1月の2回実施）。TTAP 検査実施および評価。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

障がいによる困難のため、あまり経験できていなかったことを多く経験できたことにより、興味関心を増やすことができた。また、集団の中での役割をはたすことで、他者にも認めてもらい、自己肯定感を高めることができた。

外部機関との連携により、専門的な視点で生徒の課題を見直すことができ、より良い支援につながった。

支援教育に関する研修を重ねることで生徒理解が深まり、生徒個々のニーズに即した支援と全体への支援につながった。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

プログラミングの授業において、コミュニケーション力向上のために現学級でのグループワークを計画していたが、授業進度を調整できず、実施できなかった。次回への課題である。

学習用ロボットは、小さな部品が多く4色のブロックの見分けがつかない時があり、改善の余地がある。さらに、説明書はカラーで見やすく工夫されていたが、対象の生徒にとっては、見えにくく分かりづらいものであった。教師が同時進行で組み上げていくことで対応できるようになった。

少人数へのプレゼンテーションは行うことができたので、次のステップとして大勢の前で説明や発表をする機会を設ける。

※ 大阪府では、「障害」を「障がい」と表記